3版

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ００４５３

研究課題名（和文）全体論的アプローチに基づく図書館利用者像と利用要因の基礎的研究

研究課題名（英文）study of library use pattern by Large quantitative data analysis

研究代表者
上田　修一（UEDA, Shuichi）

立教大学・文学部・特任教授

研究者番号：５０１３４２１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　図書館の利用や読書に関する議論は，実態を把握することなくされてきた。この研究の目的は，図書館利用や読書を広い視野から定量的に知ることである。SSJDA（Social Science Japan Data Archive）の二次分析に基づくと月1回以上の公共図書館利用者は13.6%だった。大学図書館では，二つの大学図書館の入館帯出の記録分析では学生が利用の中心であり，帯出の9割は専門書だった。また，オンライン調査では読書習慣のある日本人は，4割だった。最近読んだ本の6割は小説である。公共図書館の利用は約15%の住民に支えられている。読書冊数は減少しており日本では読書は娯楽とみなされつつある。

研究成果の概要（英文）：Some discussions on library use and reading have been done without knowing the actual situation. The purpose of this research is to quantitatively grasp library use and reading from a broad perspective. Based on the secondary analysis of SSJDA (Social Science Japan Data Archive), users of public libraries at least once a month accounted for 13.6%. In the analysis of admission and lending data of two university libraries, undergraduate students were the majority of users of university libraries, and 90% of their loan were scholarly books. The number of reading books is decreasing, and reading is being regarded as entertainment in Japan.

研究分野：図書館情報学

キーワード：公共図書館　大学図書館　図書館利用者　読書　蔵書

１．研究開始当初の背景

大多数の図書館は，従来から個々の利用者や利用者層の把握に関心を払ってきた。利用や利用者を明らかにするために，例えば，公共図書館については，全国図書館利用調査，来館者調査，パフォーマンス指標による測定が行われ，大学図書館においても来館者調査や LibQUAL＋に代表される図書館サービスの品質評価手法によるデータ収集が行われている。

このように図書館利用者や利用の調査や研究は,活発ではあるが，全国図書館利用調査を除けば，多くは，図書館の評価，さらには図書館業務の改善を目的とした図書館運営の側からの視点で行われている。そのため,実際に図書館を利用している人々のみ調査の対象としがちである。しかし，公共図書館も大学図書館も，利用想定している母集団,つまり自治体の全人口や大学の成員全体の中での利用者の割合を知ることがなされる必要がある。

さて，近年，図書館では，図書館利用者に対して，情報提供や場の提供などの様々なサービスを行うことに関心が移っているが，図書館の中心的な役割は，資料提供にあることは揺るがない。資料提供は，図書館利用者の読書と情報要求に対応している。図書館に対する情報要求に関する調査は数多く行われてきたが，読書との関連への関心は乏しいままであった。

出版流通においては, 販売高や書店数の長期低落傾向が顕著であるが，その背後に，個人の読書習慣の変容など読書に関する状況に大きな変化があると考えられる。読書は,身近なこともあり，多数の人々が言及しているが，言説は多いものの，読書についての議論や研究のほとんどは，子供を対象として行われてきている。ところが，成人の読書の研究はほとんどみられない。一般的には，大人は本を読まなくなったという言説が多くみられるが，客観的な根拠は乏しいのが実情である。成人の読書の実態に関する研究は乏しいため，これまでの調査をレビューするとともに，新しい調査方法を考案する必要がある。

２．研究の目的

図書館利用者は, コミュニティの成員のごく一部であるにすぎず, 多くの人々は日常的に図書館を利用してはいない。図書館利用の実態を様々な定量的方法により把握すること, さらに,図書館利用の大きな要因となる読書についてその内容と頻度を明らかにするための調査を行う。

３．研究の方法

(1)　公共図書館

最近実施された全国規模の社会調査およびパネル調査の二次分析を行った。具体的には，2005 年 SSM（社会階層と社会移動全国調査）日本調査，東京大学社会科学研究所・若年パネル調査および壮年パネル調査（2008, 2010 年実施分の計四調査）の計五種の個票データである。

また，後述のように読書と関連づけて質問紙調査を行った。

(2)　大学図書館

国内の大学で実施されている学生生活実態調査の結果を用いて，図書館利用の頻度を調査した。学生生活実態調査は，大学が学生の経済的困窮度を調べることを目的に行われてきた質問紙調査であるが，現在では，大学運営ばかりではなく，大学評価や IR と結びつき，学生から志望動機，授業，勉強，留学, アルバイト, サークル, 就職, 経済状況,日常生活，健康など幅広い情報を収集している。学生生活実態調査を網羅的に探索した結果, 19 大学で図書館の利用頻度を尋ねていた。大学の運営や，規模，環境をそろえるため,今回用いたのは，国立大学の中で，似た性格を持つ 9 大学の調査結果である。

次に，国立の A 大学図書館の業務データを

入手し，分析した。2013 年度および 2014 年度の入館・帯出データ全件を図書館利用者全員が含まれる利用者マスターファイルと照合，学部生・大学院生の入館データ約 80 万件,帯出データ約 12 万件を分析対象とした。なお，個人情報保護のため，同大学の研究倫理委員会で承認を受け，個人 ID は匿名ランダム化されている。

さらに，国立 B 大学図書館について，A 大学と同様のデータを得た。入館データは，2013 年の 60 万件，帯出は 13 万件だった。帯出データにはタイトルと分類が含まれている。

(3)　読書と公共図書館利用

成人の読書と公共図書館利用に関して，全国規模の二種類の調査を行った。一つは，2016 年 1 月に行ったインターネット調査で，945 名からの回答を得た。もう一つは，2016 年 8 月に行った面接調査で 1,200 名の回答を得た。質問項目は，比較を行うために 1979 年に内閣総理大臣官房広報室が行った「読書・公共図書館に関する世論調査」に準じている。

さらに，2017 年 8 月に全国の 20 歳以上を対象としたインターネット調査を行い 730 名の回答を得た。エッセイ，絵本，教科書，月刊誌，コミック，思想、書，実用書，週刊誌，辞書，小説，新書，新聞，専門書，電子書籍，百科事典，マニュアル，ミステリ，ライトノベルを読むことに対して読書とみなすかどうかの判断を求めるとともに，最近の読書内容，この数年間で読書の量の変化を尋ねた。

４．研究成果

(1)　公共図書館の利用

月 1 回の利用までが「図書館の利用」の実質的頻度であると考えられる。つまり，月 1 回程度の利用者までであれば同程度の頻度で図書館を利用し続け，彼らが非利用者に転ずることは少ない。しかし，年数回程度の利用者は，頻度は変わらないか，非利用者に転ずる可能性が高く，図書館の実質的な利用者とは言えない。利用しないものの多くは図書館利用者に転ずることは少なく非利用者のままである。

公共図書館を月に 1 回以上利用する者は，14%程度であり，そのうち 63.0%は継続して利用しており，図書館の利用には継続性が見られる。

また，既存研究において有意な要因とされていた性別，年齢，学歴，ボランティア活動には 1%水準で差があることが確認された。性別では，女性の利用が男性より多く，年齢の高いほど，学歴の高いほど，ボランティア活動が活発であるほど図書館をよく利用している。世帯収入に関しては 10%水準で有意であった。世帯収入が高いほど，図書館を利用する傾向がみられた。

既存研究との比較は以下の通りである。

	ベレルソン	吉川	本研究
	1948*1	2014*2	2015
年齢（より若い）	○	○	―
性別(女性>男性)	○	○	○
教育水準（高い）	○	○	○
収入（多い）	○	○	○

*1 Berelson, B. The Library's Public. Columbia UP, New York, 1949. 174p.
*2 吉川徹． 現代日本の「社会の心」．有斐閣，2014．248p.

(2)　学生の大学図書館の利用

学生生活実態調査報告と A 大学図書館入館データの分析を行った結果，前者からは，大学生の 8 割近くが大学図書館を利用し，週 1 回以上の利用者は半数以下であることが明らかになった。後者からは，入館回数はロングテールの傾向を示し，入館率は、自然科学分野より人文分野の学生の利用率が高いこと，学部学生と大学院生との間に顕著な差が

あることがわかった。大学院生の入館頻度は実態調査報告より顕著に少なかった。学部の 1 年生が最も平均入館回数が多く，2 年生で減少し，3 年生で再び増加し，4 年生で最も低くなっている。この背景には，1 年生の授業では，初年次教育の一環として図書館ガイダンスが含まれている必修の授業や図書館の利用が組み込まれている授業が多いためと推測される。2 年生ではこうした形態の授業がなくなるため入館回数が減少するが，3 年生になり研究室（ゼミ）における活動が始まることで再び増加し，4 年生は，履修授業数の減少や就職活動によって大学に来る日数が減ることと対応していると考えられる。

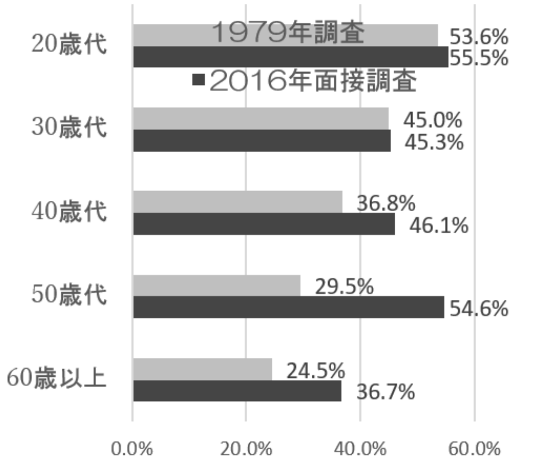
また，国立 2 大学の図書館を対象に行った入館・帯出データ全件の分析結果からは，入館・帯出の大部分を学部学生が占め，修士・博士と順に低下する，人文分野の学生は自然科学分野の学生よりも課程にかかわらず図書館から帯出していることが示された。また，帯出書の内容のほとんどは専門書であるものの学部学生は娯楽書を，修士課程の大学院生は実用書を多く借りていた。

(3)　読書の実態

読書の実態を調べる継続的な読書調査は，毎日新聞社『読書世論調査』をはじめとして，いくつか行われている。これら読書調査の結果について，年齢を 20 歳以上に限定し，経年的に検討すると，読書する人口の割合が減少する傾向は，全くみられない。そこで，これを確かめるために，1979 年に内閣総理大臣官房広報室が行った『読書・公共図書館に関する世論調査』と同じ設問を用いて，20 歳以上の 1,200 名を対象とした訪問面接調査を行った。2016 年の調査との違いを以下に示す。

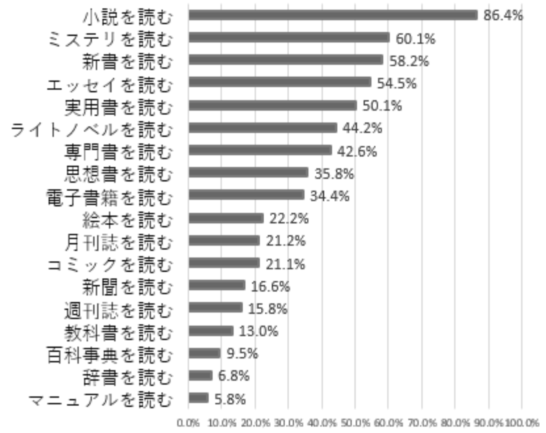
	読まない	1 年間に本を読んだ	1 か月に 1 冊以上
1979 年	42,1%	57.9%	38.4%
2016 年	35.9%	64.1%	44.4%

	女性	男性	計
1979 年	34.5%	43.2%	38.4%
2016 年	41.2%	48.0%	44.4%



1 か月に 1 冊以上本を読むという指標を用いると，2016 年の結果は，1979 年より高く，その要因は，40 歳以上の年齢層の人々が 1979 年よりも読書をしているためとみなすことができる。1979 年のように年齢が高くなるほど，読書をする人々が減るという傾向は見られず，以前は顕著だった読書と年齢の関連は薄まっていると言えよう。

出版物のタイプ別に読んだとき読書とみなすかどうかについて尋ねた結果では，小説などをはじめとした取り付きやすい本が多くなった．



回答者に読んでいるあるいは最近読んだ本の書名と著者名をあげるように求めた。小

説が6割を占め，知識や情報を得るための本は 3割程度であった。

(4)　読書と図書館

出版物の販売額が毎年減少し，書店数が減っていて，出版の将来が懸念されている。書店数の減少は，売上高が減り，経営が成り立たなくなったためである。オンライン書店の隆盛が書店に影響を与えている可能性はあるが，全体の販売額が減少していることに変わりはない。つまり，人々は本を買わなくなった。

読書の実態からみると，この 35 年の間に読書をする割合の高い年齢層は変化したが，全体に読書習慣が失われてきたとはいえず，むしろ読書をする人口は増えている。

そこで，人々は本を買うのをやめて，公共図書館を利用し，借り出すようになったのではないかという仮説を立てることができる。公共図書館の数は増加し，それに伴い総貸出冊数も増えてきた。しかし，公共図書館の利用者は，全体で 14%程度に留まっており，一定の利用はあるものの，公共図書館利用者の割合が顕著に高まってきたとは言えない。

読書の対象の範囲の調査，つまり，どのようなタイプの出版物を読んだときに読書とみなすのかという調査の結果は，読書調査の方法やその調査結果の解釈に関して再考を促すものものであった。さらには，実際に読んだ本を調査した結果では，小説などのフィクションやエッセイなどが多いという傾向が見られた。多くの人々は読書を娯楽とみなしていることは明らかであろう。

出版も図書館も文化の維持や教養を高めることをその使命の一つとしてきたが，読書の実態をみるとそうした方向とは離れつつあると考えられる。また，これは，最近，議論がなされつつある社会格差をはじめとする現代の日本人の意識や行動の変化を反映していると言えよう。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計５件）

① 上田修一

大人は何を読んでいるのか：成人の読書の範囲と内容．2017年度日本図書館情報学会研究大会，2017．

② 上田修一

大人も本を読まなくなったのか：1979 年と2016年の調査の比較．三田図書館・情報学会研究大会 2016年度，2016．

③ 三根慎二，上田修一，石田栄美

複数の大学図書館の利用データからみた大学生の入館と館外帯出の特徴．2016年度日本図書館情報学会春季研究集会，2016．

④ 三根慎二，上田修一

大学生の大学図書館の利用はどのように変化するのか．三田図書館・情報学会 2015 年度研究大会．2015．

⑤ 三根慎二，上田修一

誰がどのくらい大学図書館を利用しているのか．2015年度日本図書館情報学会春季研究集会．2015．

〔図書〕（計１件）

上田修一他．勁草書房，図書館情報学第二版．2017，295

〔その他〕

読書と公共図書館利用報告書 2017 のサイト
http://user.keio.ac.jp/~ueda/papers/readingreport2017.pdf

６．研究組織

(1)研究代表者

上田　修一（UEDA，Shuichi）
立教大学・文学部・特任教授
研究者番号：１０２３４５６７

(2)研究分担者

三根　慎二（MINE，Shinji）
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：８０４６８５２９